Season

田中 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｅａｓｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ４９２９Ｆ

【作者名】
田中　遼

【あらすじ】
季節の風が吹く。

小学五年生の翔太と華は、初めて訪れた雪景色の中で出逢い、透き通るような好意を抱いた。その、恋と呼ぶには早すぎる二人の想いが、二人の回りの少年、少女の心にほんの少しだけざわめきを広げていく。その一続きの季節のこと。

誰もが知っていて、忘れかけてしまっている大切な気持ちを、季節の風に乗せてお送りします。

雪の精

少年は一人、空を見上げていた。
最初は立ったまま上を向いていたのだが、楽な姿勢へ楽な姿勢へと体が動いて、今は仰向けに寝転んでいる。

空は全くの灰色で、太陽を浴びていない大地は痛いような冷気に包まれていた。
そこに白の結晶というべききれいな粒が、ハラリ、ハラリと舞う。

彼はそれをじっと見つめている。
初めて見る大きさの雪とその静けさに、瞬きさえも忘れていた。

そう、辺りは———彼の住む大きな街と違って———限りなく静寂に近かった。

時たま遠くから、鳥の羽音や鳴き声、木や屋根から雪の塊が落ちる音が聞こえてくるぐらいで、全てが沈黙している。

少年はゆっくりと冷気を吸い込んでから目をとじ、雪の積もる音を聞き取ろうとした。
息を殺し、全神経を張り詰めて。

何も聞こえない。

彼は満足げに息を吐き出し、目を開けた。
瞬間、彼はぎょっとして身を強張らせる。
何の音もしなかったにも関わらず、一人の女の子がが彼の視界に現れ、彼を上から覗き込んでいたのだ。
彼は目をまん丸にして、少女の視線を受け止めている。
二人とも瞬きもせず見つめ合った。

しばらく経って、少女は口元を覆っていたマフラーを手で引き下ろした。

息が白くかすれて、すうっととけていく。

彼女の声が囁くような調子で問いかけた。

「……何してるの……？」

苦しい。

少年は自分の呼吸が止まっていることに気付き、「ぷはぁ」と息を吐き出した。
その声は彼が思ったより大きく響き、少年は慌てて口を押さえて飛び起きた。

心臓の音がとどろいている。

肩越しに振り返ると、少女は身じろぎもせず、じっと待っていた。

少女は雪のように白い上着を着ていて、帽子やマフラー、手袋、ズボンも同じように真っ白である。
透き通るような白い肌の中、うっすらと赤くなっている頬と鼻の頭、それに黒々と輝いている目がふわりと浮かんでいた。
息を呑むほど綺麗な少女の顔立ちに、少年は見とれてしまいそうになる。

少年は目をこすり、少女が本当に存在していることを確認した。
今まで、夢の中であっても、こんな子を見たことはなかった。
彼は一瞬本気で、少女のことを妖精だと思った。

妖精。

それも雪の精だ。

とても人間の女の子とは思えなかった。

何かのはじまる声

しかし、じっと見つめ続けていても、少女の存在が揺らぐ気配はなかった。
少年が少女の足元に目をやると、彼女がしっかりと歩いてきたらしい跡もしっかり残っている。

彼は少女の目を再び見つめる。
彼女はまだ待っていた。
少年はゆっくりと口元から手を下ろし、鼻から静かに息を吸い込み、ゴクリと唾を飲み込み、心臓の音を感じながら、

「雪を……見てたんだ」

と小さな声で言った。少女はクスッと笑った。

「目をつぶって？」

少年は治まるどころかさらにひどくなる鼓動の高鳴りに戸惑いながら頷いた。

「……うん」

少女は微笑んだまま、わずかに首を傾げた。

「おもしろい……？」

少年は何とかして静寂を保とうとしているような静かな声で言う。

「ううん。ただ、すごくきれい」

少女は肩越しに振り向き、空を見た。

雪は降り続いている。
音を吸い込み、色を塗り消し、そして自らは優雅な舞を繰り広げながら。

静まり返った舞台の上で、少年は少女を見つめ続けている。
その内側で誰にも気付かれないほど静かに、それでいて鳴り響くファンファーレのようにはっきりと、そして途方もなく複雑で、しかも限りなく純粋な何かが芽吹こうとしていた。

彼は確かにその始まりを感じていたのだが、その名前を少年はまだ、知らない。

少女はしばらくそのまま佇んでいたが、今空から舞い降りてきている雪のように、不意にふわりと少年に向き直った。
微かな微笑を浮かべたその姿に、少年は呆然としながら見入ってしまっている。

「……一緒に見ていい？」

少女の問いかけに少年は一瞬動きを止める。
しかし程なく、大切な何かを扱うときのような慎重さでコクリと頷いた。

「……うん」

「ありがと」

少女は少年に笑いかけ、彼に近付いてくる。
「ギュ、ギュ」と彼女の足元で雪が鳴く。
少年が座ったままで見つめ続けていると、少女は彼の横に勢い良く寝転がった。
彼女の倒れこむ「ボスン」という音を聞き、彼女の身体にそって出来た雪のへこみを見て、少年はまた少しだけ安心する。

「……君、名前は？」

少女はふっと息をついて答えた。

「華。君は？」

華は顔を少年のほうに向けた。
少年は咄嗟に身をかわすように視線を空に戻した。

「……麻地翔太」

華はニカッと歯を見せて笑った。

「翔太、だね。はじめまして」

翔太はまた横目で華を見ると、「ボスン」と後ろに倒れこんだ。

そして何か居心地悪そうに

「……はじめまして」

と呟く。

華はその横顔を見つめ、ちょっとだけ微笑んだ後、また雪の舞に目をやった。

背中からじわじわと冷たさが迫ってくる。

しかし二人は、そんなことには気にも留めず、ただ、舞い落ちる雪たちを見つめていた。

少女の名前

「……えっと……」

翔太は迷っていた。
華は「華」としか教えなかったが、そう呼びかけるのが彼には躊躇われた。
彼女はニッと笑って翔太に言った。

「「白井さん」ってよく呼ばれるけど、名字で呼ばれるのあんまり好きじゃないんだ」

「……なんで？」

「なんとなく」

答えた後、華はじっと翔太を見つめ、彼を待った。
翔太はその視線に気付き、散々迷った挙句、微かに眉間にしわを寄せて、言いにくそうに言った。

「じゃあ……華……ちゃん？」

翔太の窮屈そうな言い方に、華はクスクス笑った。

「わざわざ「ちゃん」付けにしなくていいよ」

翔太は少しだけ唇を尖らせた。
そちらのほうがハードルが高く思えたのだ。

華はニコニコしながら翔太を待っている。
翔太はそれをちらりと見た後、目を伏せ、小さく呟くように言った。

「……じゃ、華」

翔太はすぐに目を上げ、顔を華の方に向けた。
とはいえ視線は彼女から逸らしている。
華はそれでまた微笑んだが、今度は何も言わなかった。

翔太は言いにくそうに尋ねる。

「……いくつ？」

「5年生」

華の満面の笑みを浮かべた。
それを見た翔太は、思わず笑ってしまったが、華が「お」っという表情をするとすぐ、その笑顔を引っ込め、また空を見る。
華は「おっと」と心の中で呟いた。

（……慣れ慣れしかったかなぁ。それとも、あんまり話しかけないほうが良い……？）

それで指のとげを抜くかのように慎重にタイミングを測って質問を返した。

「翔太は？」

華の心配をよそに、翔太は彼女に向き直り、くすぐったそうにニッコリした。

「同じ」

そして彼と、内心ホッと息をついた華が顔を見合わせる。

二人は恥ずかしそうに頬を染め、お互いに微笑みを返した。

二人が空に向き直ると、また、静寂が訪れた。

心の中

「ねぇ」

しばらくして華が問い掛けた。

「家はどこ？　この辺なんでしょ？」

翔太は首を横に振った。

「東京。今は父さん母さんの友達の家に来てるだけ」

「……そう……」

華は内心肩を落としたが、それをなるべく表には出さないようにしていた。

「いつ帰るの？」

「明日」

また華は心の中を隠そうとしたが、今度の方が難しかった。

翔太は何気ない口調で尋ねる。

「華はこの辺に住んでるの？」

「今は」

「……今は？」

翔太の問いかけに、華は少しだけ諦めたような笑みを浮かべた。

「よく引越すんだ。お父さんの「再出発」のたびに」

「ふーん」

翔太は彼女の方に顔を向け、じっと見てから言った。

「もしかして、来たばっか？」

言い当たられた華は目を丸くした。

「え、なんで？」

翔太は華の服を指差す。

「だって、それ、全部新品っぽいんだもん」

華は自分の服を見下ろし、困ったような顔になる。

確かにその通りだったが、普通、ちょっと見ただけで気付けるものではない。

「……すごいね。よく見てる」

翔太は照れたように笑った。

「それに、俺がここに住んでないって言った時、なんかがっかりしてたでしょ？」

彼の無邪気な言葉に、華は少しだけ息が詰まった。
彼女はそれをとっさに隠そうとしたが、まったく上手くいかなかった。

彼女の息を呑む声が、静寂に響く。

翔太に振り返られた華は小さく咳払いをした。

それでも翔太は彼女をじっと見ている。

「……よく見てるね」

華はしぼり出すように呟いた後、たまった息を一気に吐き出した。
息は冷気に触れて一瞬白くなり、手に落ちた雪のように溶けていく。

翔太はしばらく彼女の横顔を見ていたが、それ以上、何も言わずに空に向き直った。

銀世界

段々と日が落ちていっているのが分厚い雲を通して分かる。
雪はたった今止んだ。

翔太は薄暗い灰色の雲を眺める気はなく、飛び起きるように立ち上がった。
華はそれに倣って体を起こす。

ずっと空を見ていた二人の前に一面の銀世界が広がった。
二人はほとんど同時に息を呑み、翔太が華に手を差し伸べて叫んだ。

「華！」

華も反射的にその手を掴み、翔太は彼女を引っ張って立たせた。
別に立たせてどうかなる訳でもなかったが、じっとしていられなかったのだ。

白い。

どこまでも真っ白だ。

ずうっと遠くの方で景色がかすむように暗くなり、光が吸い込まれているように何も見えなくなっている。

完全な沈黙。

何かが迫ってくる気配だけが、手をつないだまま佇んでいる二人を取り囲んでいた。

雪遊び

先に我に返った華は、まだ遠くを見つめている翔太の脇腹を突いた。

「かまくら作ろ」

翔太は一瞬言葉が出てこない。

ぼうっとしていたこともあるし、自分の真横、その目の奥に映る自分の姿が見えるほど近くにいた華の姿に驚いたこともある。

華はにこっと笑い、もう一度言った。

「かまくら。ね？」

翔太は一度銀世界に目をやり、それからもう一度華に目をやった。

「かまくら？」

「うん。作りたい」

目がキラキラ輝いている。翔太は思わず笑ってしまったが、結局は首を横に振った。

華は「えぇ？」と抗議の声を上げたが、翔太は真剣な表情で「ダメ」と言った。

とはいえ、その隙間から笑顔がこぼれているのを見て、華は何かを期待することが出来た。

「かまくらはスコップがいるでしょ？　それよりさ……」

彼は手袋をはめなおした。

「雪ダルマ作ろう」

華は先ほどと同じく目を輝かせて頷き、暗くなっていく雪国の平原で二人は雪玉を作り始めた。

最初は交代交代で転がしていた雪玉が、しばらくすると一人では動かせない大きさにまでなった。

そして二人で力いっぱい押してもうんともすんとも言わなくなり、翔太は汗だくの体を雪の上に投げ出した。

「ひゃあぁぁぁぁ……疲れたぁ！」

ひんやりとした冷たさが、熱い身体に心地いい。

華はまだ雪玉を押していた。

「華ぁそん位で良いじゃん」

実際、雪玉は翔太の腰位の高さまで大きくなっていた。

それでも華は押し続ける。

唸りながら彼女は言った。

「大きい方が！……長く！……残るから！……う゛う゛ぅ……」

しばらく翔太は華を呆れたように見ていたが、不意に立ち上がり、手伝い始めた。
二人で唸っていると、重い雪玉がのそりと前に進む。
途端に翔太は力が抜け、雪の上にうつぶせに倒れた。
横を見ると華も同じ様になっている。
彼女は翔太の方を向くと汗をかいた顔でニヤっとした。
「動くって分かったし、もうちょっと大きく出来るね」
「え！？」
華は声を上げて笑った。
「冗談だよ、冗談！」
翔太は怒った振りをして大声で言った。
「笑えない！」
「ゴメンゴメン。さ、頭」
翔太はさっと立ち上がると、雪を手ですくい、雪合戦でつかう様な雪玉にした。
華がポカンと見ていると、彼はそれを胴体部分にぽんと置いた。
「はい、完成！」
そう宣言した彼は伸びをしながらぶらぶらと歩きだした。

華は一瞬呆気に取られていたが、次の瞬間、地面の雪を左手ですくい、右手でバッと雪だるまの「頭」をつかみ、投げる。

「痛！」

翔太は頭をはらって振り返り、続けざまに飛んできた雪玉を顔面で受けた。

華はガッツポーズをして笑う。

もちろん、翔太が即座に応酬し、白い弾と二人の楽しげな喚声が飛び交い始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4929f/

Season

2012年1月14日01時48分発行